

「箱根で仕事ができることは、私にとってこの上ない誇りです」
そう語る菊池巧さん(46)は、神奈川県箱根町の職員として税務に携わっている。帝京大学経済学部を卒業して以来23年間、町の財政を支えてきた。箱根町は温泉地として栄え、観光業を原動力に発展してきた町。訪れる観光客は年間約2000万人で、外国人観光客も確実に増えていると聞く。菊池さんに税収面の状況について尋ねてみた。
「たとえば温泉地を特徴づける市町村税に、入湯税があります。納めるのは利用客で、税率は1人1日あたり150円(標準税率)。観光施設などの整備に充てる財源になりますが、箱根町ではその収入が年間7億円におよびます」
近年、この額は2位の札幌市、3位の熱海市を引き離して全国1位。箱根人気を物語るデータだ。しかし、町の財政は安泰とはいえないらしい。
「良きライバルである熱海も近くにあり、昨年のように箱根山・大涌谷周辺の火山活動が影響して税収が大幅に減る可能性もあるわけです。一方で、他の地方自治体と同様に人口減少や少子高齢化も進んでいます。ですから、私たち職員にとって、地域活性は、人気にあぐらをかくことなく取り組むべき重要なテーマなのです」

「6年前から毎年開催しているのが、駅伝展です。出場が決まった大学のユニホームを全て取り寄せ、新年に行われる箱根駅伝の2カ月ほど前から庁舎内で展示などを行っています。メディアにも取り上げられ、温泉を訪れた外国人観光客も来庁されます。そして今では、出場する大学側から新しいユニホームが届くほど影響力をもつようになりました」
箱根駅伝のプロモーションに、菊池さんが並々ならぬ想いをもつには理由がある。学生時代は陸上競技部に所属し、出場をめざした選手の一人だったからだ。現在も部員に助言を与えるなどサポートを厭わない。すべては栄光のタスキを渡し続けるために。
「現役時代に学んだ仲間の有り難みや、行動をもつて範を示すことの大切さは、今の仕事にも生きています」
『想いさえあれば、できないことはない。それが学生時代に刻まれたDNA(イズム)と話す菊池さんには、箱根を舞台に放ちたい第3の矢があるという。
「各大学のエースが熱戦を繰り広げる、山の5区」を使って、ロードレースを開催することです」
高低差860メートル、23キロにおよぶ最長区間を走りたいがために、全国から一般ランナーが押し寄せる。そんな新しい風物詩が、箱根町にまた一つ生まれるかもしれない。

想いさえあれば、できないことはない。



菊池さんの職場は総務部税務課。税を納める住民のさまざまな相談に耳を傾ける。職員が一体となって町のプロモーションに力を入れ、箱根町仙石原を舞台に描かれた人気アニメとのコラボレーション企画も多い。



箱根町庁舎内で11月頃に開催されている「駅伝展」。出場が決まった大学のユニホームの他、過去の名場面を集めたフォトなどを展示。注目の選手紹介を行うなど、目玉企画が毎年用意され来庁者を飽きさせない。

菊池さんには、自ら発起人となって推進する地域活性化策がある。それは、箱根のもう一つの顔といえる。箱根駅伝の魅力をより多くの人に知らしめること。温泉に次ぐ第2の矢として観光客誘致につなげたいと熱く語る。
「6年前から毎年開催しているのが、駅伝展です。出場が決まった大学のユニホームを全て取り寄せ、新年に行われる箱根駅伝の2カ月ほど前から庁舎内で展示などを行っています。メディアにも取り上げられ、温泉を訪れた外国人観光客も来庁されます。そして今では、出場する大学側から新しいユニホームが届くほど影響力をもつようになりました」

信念が、世の中を変えていく。

iSM X 地域活性

